

鎌倉市中央図書館

近代史資料室だより

第2号

鎌倉市中央図書館  
近代史資料担当  
鎌倉市御成町 20-35  
電話 0467 (25) 2611

鎌倉海浜ホテル追憶

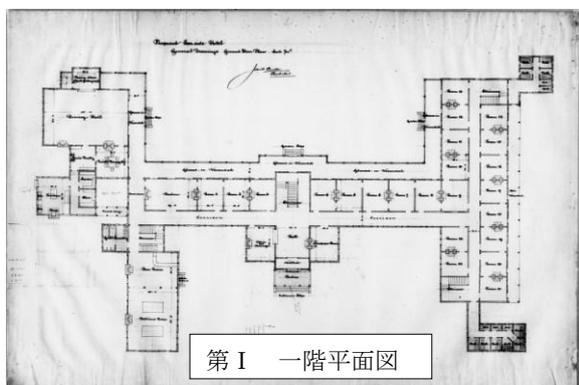
研究ノート ①  
(その2)

ジョサイア・コンドルの設計図

明治末から大正時代にかけて写真や絵はがきに紹介されている海浜ホテルは洋風総二階建て、ハーフェインバー様式の堂々とした建物である。初期の下見板張りサナトリウム風のものとはかなり違っている。

この新しい建物が、御雇い外国人建築家イギリス人ジョサイア・コンドルの設計によるものであると一般には伝わっているが、コンドルの作品集に記録が残っていないことで、どこまでコンドルが関わったのか疑問が存在するといふ。

現在コンドルによる設計図は京都大学で十三枚所蔵されている。立面図二枚、平面図九枚(一階五枚・二階四枚)、基礎伏図一枚、玄関詳細図一枚である。これらの図面について河東義之氏が詳しく分類と分析を加えておられる。



第I 一階平面図

『コンドル建築図面集』中央公論美術出版社氏は図面を五つのグループに分類している。その内、図面表題 (Proposed Sea-side Hotel) とサイン (Josiah Conder Architect) が記されているのは第Iグループの三枚のみでその中の立面図には日付 (July 1906) が書かれている。平面図に書かれた部屋数は一階二十三室、二階二十七室、計五十室である。中央部には大きめの部屋が東西一列に、右翼部には小さめの部屋が南北二列に配置されている。三枚とも鉛筆・彩色仕上げである。

第II 第III 第

IVグループの図面は全て平面図であるが、部屋の配置と数、左翼部にある食堂の形や階数に違いがある。三グループとも部屋は中央部が二列に細かく区切られ、第IIでは右翼部南北にも部屋があるので全六十九室に増え、第IIIでは右翼の部屋が無く、その代わりに食堂の二階に十部屋配置され全五十室である。第IVには二階平面図が欠けているので総室数がわからないが、一階平面図は第IIIとほぼ同じで一階部屋数は同じ十八室である。さらに第IVには基礎伏図・基礎断面図・詳細図が付いている。

第Vグループには平面図、立面図、玄関部分詳細図があり、部屋数は食堂の階上の部屋を大きめに取ったせい第IIIより少なく全四十四室となっている。第IIIIVでは何れも食堂の上に部屋を配置している。

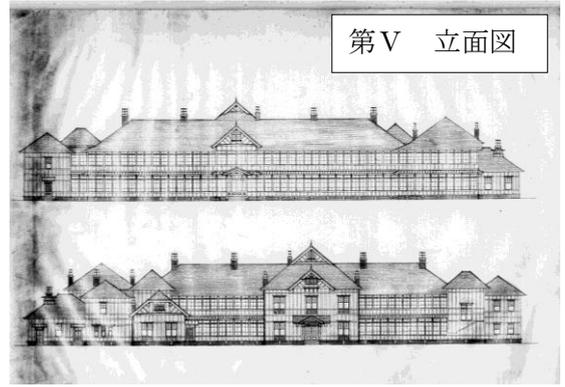
目次

- ◆ 研究ノート① ..... 1
  - ◆ 鎌倉海浜ホテル追憶 (その2) ..... 1
  - ◆ 平成二五年度郷土資料展「九〇年前の関東大震災」報告 ..... 4
  - ◆ モニュメント② ..... 7
    - ◆ 日米海底通信中継所記念碑 ..... 7
    - ◆ 古文書 (大津家日記農業控帳) ..... 7
    - ◆ 寄贈資料紹介 ..... 8
      - ◆ (埋立地図面・鎌倉アカデミア扁額) ..... 8
      - ◆ 古写真 (大船駅・北鎌倉駅) ..... 8
      - ◆ インタビュー (むかし語り) ② ..... 9
- ◆ 滝川梅子さん

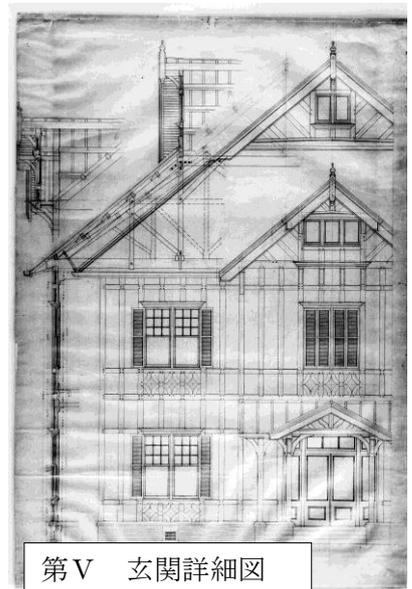
期のコンドルの意図が変化していったのであろうか。平屋であれば関東大震災にも潰れなかったのではないかと想像する。

また実際には右翼部に部屋がある。第一第Ⅱグループの図面が該当するが、南の海側だけのようでもあり、外観だけでは設計図と比較するのが難しい。第三Ⅳには右翼部に部屋は無い。第Ⅶグループの立面図と玄関部詳細図は写真で見える実際の建物と類似している。特に玄関はハーフティンバーの意匠も含めてそっくりに見える。立面図では右翼部分を除いて中央部と大食堂は一致しているようである。

このように実際の建物に完全に一致する最終的な設計図は見当たらないが、コンドルの設計が基本になって改築されたことは確かだと



そこで実際の建物とおおよその比較をしてみると、実際には食堂が一階の食堂広間の上に部屋が二階建て、第一第Ⅱでは食堂が平屋であったが、初



思える。

当時の新聞には、旧建物を修繕したので、新築落成までそれを仮用する（「貿易新報」明治40年3月17日）とあり、翌明治四十一年には新館が落成したので、「附属建物西洋造二階建一棟凡そ百七十坪売却広告」を出している（「貿易新報」明治41年6月1日）。

また当時ホテルが出した



海側、松林越しに見た海浜院ホテル

二色刷英文パンフレット「KAMAKURA KAIHIN-IN HOTEL」には表紙に大仏の写真

を載せ、中には背の高い松林越しに見える新しいホテルの海側全景、食堂、ラウンジ、ビリヤードルームの写真そして支配人青山和三郎を中心にスタッフ一同が収まっている。大々的な増改築を終え次の発展を期待している様子が伝わってくる。しかし、改築の出費はその後の経営に重くのしかかったようである。

**著名な宿泊者**

明治二十年の開業以来、内外の著名人が宿泊し、なかでも外国人の数が多かったことは、前号の年表で表記した。

新築したばかりのホテルで長期宿泊したのは、ドイツ人細菌学者ロベルト・コッホ夫妻であった。世界漫遊旅行に出ているコッホ博士は、日本の北里柴三郎達の歓迎を受け、明治四十一年（1908）六月、横浜に到着し各地で講演や歓迎会に招かれ忙しく日本国内をまわっていた。静養のために日光を訪れたが、梅雨時の季候が合わず、七月三日から二十六日まで海浜院ホテルに滞在し由比ヶ浜の海辺を楽しんだ。鎌倉の医師達と交流した様子がホテルの庭で撮った記念写真に残っている。ホテルのサービスマンにも満足したらしく、帰国に際し夫妻は、働いていた女性村木キヨ（通称はな）をドイツまで連れて行った。彼女はドイツで博士の死を看取り、二年後無事日本に帰国した。アメリカ経

由でドイツへ渡り、帰りはシベリア鉄道で、当時地球を一周した鎌倉の女性は彼女しかいない。外へ向かう海辺の人の気質を感じる。

当時(大正三年)小説家夏目漱石は「こころ」を新聞連載していたが、その中で主人公がホテルの海側の出口の砂浜で、「先生」に会う場面が書かれている。漱石もホテルには立ち寄ったのであろうか。

### 大正期のホテル経営

ホテルの経営には時代の変化とともに、さまざまな苦労がともなう。支配人青山の経営は、新館建築後しばらくは繁盛したものの不景気時代に直面し、青山は辞任し、三代目支配人ペルノン氏へ交代した。しかし不景気は深刻化し、一年間の損失金二万円余となり、ホテル閉鎖の危機を迎えるほどであった(鈴木原稿)。

やがて大正五年、明治屋磯野長蔵が土地・建物・営業権一切を十二万五千円で買得し社長に就任し、社名も「株式会社 鎌倉海浜ホテル」と改称した。定款には「当会社は内外の賓客の宿泊・宴会・貸席並びに酒類・煙草類の販売およびこれに関連して必要又は有益な事業を営むことを目的とする」(『明治屋百年史』)と述べている。磯野は資本金を六十万円に増資し、松方乙彦、茂木惣兵衛ら有力な株主三十名を揃えた。その後大正十二年関東大震災に至るまで

順調な経営が続いたと言っており。

開業と同時に超満員大盛況であったのは、ロシア革命亡命ロシア人による長期滞在や欧州大戦による好景気で日本人成金のホテル利用が著しかったとされる(鈴木原稿)。さらにペルノン支配人の料理の魅力によりドイツ人洋菓子職人ユーハイム夫人エリーゼ、カフェエューロップ支配人バンホーテン、豚肉加工業者ウオルシユケ等が滞在しまさに千客万来だった。またロシアより亡命したバレリーナ、エリアナ・パヴロバ、ナデジタ・パヴロバが大正八年夏、横浜グレート座でデビューした翌日(八月二十七日)海浜ホテルで上演した。華やかな賑わいが見えてくる。

この繁盛の中でさらに建物増築が行われた。大正九年七月、右翼部に海に向かって、バス付き二十四室を持つ二階建てが新築された。有名な「曾禰・中條建築事務所」による設計である。この時海側中央に庭に突き出したラウンジも増築されたと思われる。この年十月、鎌倉は「世界日曜学校大会」参加者一千人を鎌倉に迎えた。その内海浜ホテルは休憩所として三百五十人を受入れた。

当時の思い出をのちの支配人黒川威は次のように語っている。「冬の海浜ホテルの客室の中にはマントルピースがあつて薪や石炭をくべて、暖をとる仕かけだった。廊下や食堂は全

部ストーブを備えて温めていたのが、大正末期になってスチームラジエーターを取り付けたから、廊下に出ても冬の寒さを感じさせない。」(『嗜好』434号・明治屋)

しかし、大正十二年九月一日、関東一円を襲った大震災で鎌倉町は壊滅的な打撃を被った。倒壊家屋の下敷き、津波、火災などで四百二十名が死亡した。海浜ホテルも大食堂が倒壊し、二人の従業員が圧死した。写真左手前の建物は窓が壊れたラウンジ、その奥が一階が潰れた大

食堂。



た春田助太郎を迎えた(九月)。ホテルが競争

時代に入るなか大衆向け政策をとりながら、新たな時代に踏み出してゆく。昭和の海浜ホテルは次号で紹介したい。カラー刷りのパンフレット類も多く興味深い時代である。(大正・昭和期の略年表は次号で掲載の予定)(平田恵美記)

平成二五年度郷土資料展報告

九〇年前の

「関東大震災」と鎌倉

一九二三年九月一日の震災写真から見えるもの―  
展示期間 九月一日(日)～一〇日(火)

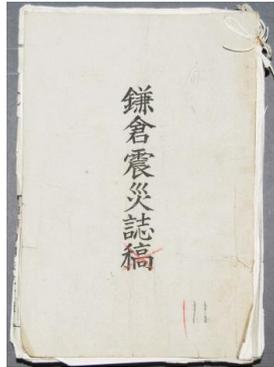
一九二三年(大正十二年)九月一日、午前一時五八分、相模湾北部を震源とするプレート型地震、マグニチュード八クラスの地震が関東南部から東京方面を襲いました。鎌倉は一瞬のうちに壊滅し、山は崩れ一時は陸の孤島のような状態になりました。『鎌倉震災誌』(昭和五年鎌倉町役場刊)によれば、被害は鎌倉町で全壊一四五五戸、半壊一五四九戸、埋没した家八戸。さらに津波による流失一一三戸、地震直後の火災で全焼が四四三戸にのぼり、半焼は二戸で、死者四一二名、重傷者三四一名を数えました。大船(山ノ内を含む)の被害は全壊四五〇戸、半壊八〇戸、死者一八名、負傷者は二三名。腰越津村の被害は全半壊合せて三一〇戸、死者七〇名でした。なお、深沢村もかなりの被害を蒙ったようです。(展示リーフレットより)

今回の展示では、近代史資料室に所蔵している『鎌倉震災誌』作成時の原稿をはじめ、「震災書類」、「震災写真」、「震災手記」、「震災絵巻」などを五つの展示ケースで紹介しました。

展示ケース①『鎌倉震災誌』が出来るまで

この本は、一九二三年九月一日の地震と津波、さらに火災に見舞われた鎌倉町の被害の状況と復興の過程を克明に記録し、後世の私たちに事実と教訓を伝えていきます。資料集めなど、編集には多大な苦勞がともない、七年の歳月を要し昭和五年に版行されました。

展示物 『鎌倉震災誌』清書原稿・原稿「序」鎌倉町長清川来吉・『鎌倉震災誌』(昭和五年)など

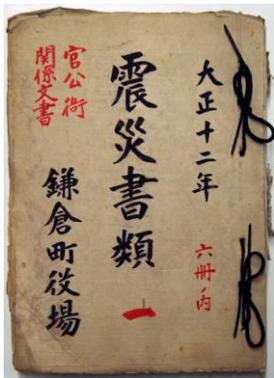


「鎌倉震災誌稿」  
謄写版刷割付原稿

展示ケース②『震災書類』より

震災直後から鎌倉町役場がおこなった事務に関する書類が六冊にまとめられています。

【震災書類 鎌倉町役場】(六冊)・鎌倉警備隊警戒配備要図・復興調査委員会開催通知など



「震災書類 一」  
余震や飲料水に関する注意、被害概況など官公衛関係の文書がまとめられている。

展示ケース③ 救援物資と配給

町の名士や商店、海軍、各地から救援物資が集められ、食料品をはじめ、蠟燭や毛布など生活必需品が配給されました。

【配給品領収書・廉売品請求書など】



「物品請入簿」  
(大正十二年九月～十月十六日)

展示ケース④ 社寺の被害調査

各社寺からの報告書や、被害一覧がまとめられています。焼失は免れましたが、神社社殿では、全壊十棟、半壊四棟、寺院堂宇では、全壊二十八棟、半壊二十五棟の被害が報告されています。

【極楽寺被害届・「寺院倒壊届」補陀洛寺など】

展示ケース⑤ 「坂ノ下埋立地」に描かれた震災復興・昭和の夢 (資料寄贈：武田光比古氏)

震災後も放置されていた坂ノ下字霊仙から稲村ガ崎にいたる海岸線一帯を埋め立てて、一般住宅・遊園地・ホテルを建設する計画がありました。(8頁の「寄贈資料紹介欄」を参照)

【「公有水面埋立許可願」昭和三年三月十五日・「鎌倉由比ヶ浜分譲地案内」など】



「社寺書類」  
震災被害調



鎌倉停車場前

激震と火災が間近まで襲ったが、大正5年に建築した駅舎は幸い無事な姿をとどめている。



大仏前進

庫裡は全壊、大仏も全体が1尺5寸(約45cm)ほど前にずり出し、基壇の前の方が1尺5寸ほど沈下した。さらに翌年1月15日の強震で全体が1尺ほど後退した。なお、津波はここまでは到達していない。



霊山崎より見た由比ヶ浜海嘯のあと

海を見たら急に海水が沖の方へ引き出した。

其の時津波が来るぞ、逃げろと言う声が出た。子供達は稲荷様の松の木(5本あり今の10倍位い広がった)にだきつけと言う声に10人位の子供達が松の木にだきついた。途端、海の方から土茶黒いようぜん山(霊仙山、高さ8米位)がかぶつて来た。これが津波だった。

気を失つてみた私達が気がついたとき秋元さん前の空地に5、6本ある大きなアジサイの木にぶら下がってゐた。

(木村春夫氏手記より)

○震災写真から見えるもの  
 展示写真の多くは、震災後間もなく、この惨状を記録することを重要と考えた「鎌倉同人会」(陸奥廣吉)が、長谷在住の写真師山辺善次郎に依頼し撮影したものです。写真は希望者に頒布され市民の手に残りました。  
 【大仏前進／八幡前通り(画)／鎌倉停車場前／鎌倉銀行・町役場あと／ガード下から停車場付近焼け跡／立退き先標柱／八幡前火事 など】



一の鳥居

瀬戸内海犬島の石で、寛文8年(1668)に建造されて以来、幾度かの大地震で破損したという記録があるが、ついに倒壊してしまった。修復再建されたのは、実に昭和12年3月であった。



長谷・坂ノ下津波の図

この絵図は、体験者の手記をもとに作製しました。

○「震災手記」  
 当時、震災を体験した方の手記をはじめ、鎌倉在住の作家、大佛次郎、久米正雄などの震災に関する文章、約六十点をまとめました。  
 ○「長谷・坂ノ下津波の図」(左図)  
 (作成：渋谷雅子・伊東雅江)  
 「その日は朝から雨模様で、蒸し暑かった。昼前から晴れてさらに暑くなった。お昼ごはんを食べようとしていた時、グラツと来た。身体がコロコロ転がって立っていられない。思わず松の木にしがみついた。…」

○追悼―震災一周忌

大震災での殉難各位を祭るために、大震災追悼式が行われました。

【「大震災追悼式弔詞」鎌倉町長清川来吉など】

○震災復興

震災から三年目の夏に、報告祭、野外ページェントなど復興祭が行われました。鎌倉町役場が新築され、鎌倉国宝館が建設されました。

【鎌倉国宝館建設 祝辞・復興祭写真など】

○市内に残る震災慰霊碑

(写真撮影原山正征) 震災後、社寺境内や小学校などに慰霊碑が建てられました。

【震災追憶供養関東大震災記念碑(腰越小学校)・大震災歿死供養碑(和田塚)など】



関東大震災歿死供養塔 (腰越浄泉寺) 大正十二年九月一日

○「震災写真」(飛行偵察写真)

偵察日：九月九日 震災直後、横須賀海軍航空隊が伊豆半島、三浦半島、館山湾の上空から沿岸部を偵察飛行し、震災被害の状況を記録しました。鎌倉地域は六枚の写真が存在します。(アジア歴史資料センター資料「震災写真帖 第二輯」より)

○震災応急測図原図

国土交通省国土地理院(旧参謀本部陸地測量部)には、関東大震災の被害状況を記載した「震災地応急測図原図」が保管されています。この地図は、関東地震直後の九月六日から一五日という短期間で、当時の参謀本部陸地測量部が延べ九四名の要員を配して作成したものです。

鎌倉・横須賀・浦賀などの市街地の倒壊・焼失の状況、鉄道や道路の損壊状況が克明に描かれています。【五万分之一秘図地域「横須賀」「三崎」】

○「大正鎌倉大震災写生図」

鎌倉国宝館所蔵 鎌倉在住の洋画家・大橋康邦は、被害状況を十六枚の水彩画で表現しています。

○「鎌倉大震災絵巻」(全六巻)

鎌倉国宝館所蔵 鎌倉在住の日本画家、藤原草丘が、関東大震災後の鎌倉の様子を描いたものです。



鎌倉大震災絵巻 第6巻八幡祠前樹図(部分)

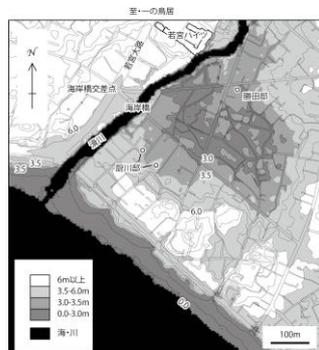
鶴岡八幡宮の舞殿、楼門が全壊し、本殿が大破している状況が描かれている。

第6巻では、八幡宮から若宮大路に沿って、鎌倉停車場付近を過ぎ、下馬の辺りまで描写されている。

○鎌倉の津波記録地と標高分布

(作成：萬年一剛) 大正関東地震(関東大震災)の津波について書かれた手記などの記録を、基盤地図情報をもとに作成した地図上に落としました。

【豆腐川・滑川流域・稲瀬川流域】



鎌倉・滑川流域の津波記録地と標高分布

従来の研究や記録と新たな現地調査の結果をふまえ、津波高、浸水範囲、進入経路等を再検討して作成。

○記念講演「一九二三年大正関東地震による津波」

萬年一剛氏(神奈川県温泉地学研究所)



満員の会場の中、津波についての基本的な知識をはじめ、大正関東地震の津波について、また、鎌倉で実際に行われた津波堆積物調査について、お話いただきました。

九月七日(土) 中央図書館にて開催されました。

※展示は終了しています。会期中は、のべ、九〇一名の方にご来場いただきました。現在、巡回ミニ展示を行っています。

# モニュメント ②



「日米海底通信の史跡」碑

## 【日米海底通信中継所記念碑】

一九〇六年八月（明治三九年）、サンフランシスコ〜小笠原島間の太平洋の海底に海底通信線が敷設され、日米間で電信が開通しました。すでに米国はサンフランシスコ〜グアム間を敷設していたため、日本は明治三八年、三九年と二年かけて小笠原島〜グアム間を引きました。グアム線工事においては、そのルート上が火山地帯であること、過半が二〇〇mの深海であり、その最も深いところでは四五〇mであったため、念入りな調査を重ねた上での未曾有の大工事だったそうです。

開通当初から二五年間、日本側の陸揚地は東京越中島にありましたが、一九三二年五月（昭和六年）、鎌倉材木座に移されました。鎌倉への移設の理由として、東京湾内での漁船の航行や軍艦の錨による海底線の断線、また東京市内電

車線からの電流による通信妨害など人的原因の障害が頻発していたからといわれています。鎌倉に変更してからの障害をきたす原因には湿気の急変によるものがあつたようです。

鎌倉中継所の建設地は、材木座海岸近くの海岸通りと称する道路に面し、敷地約一六〇〇平方メートル、鉄筋コンクリート平屋建て、外部内部とも白色仕上げの当時としては新様式の造りであり、道路側の垣は高さ一メートル程の金網を利用し、変わった感じを与えたものでした。また別荘地帯である鎌倉において、余りみずばらしい建物は建てられないのではという考えもあつたといわれています。

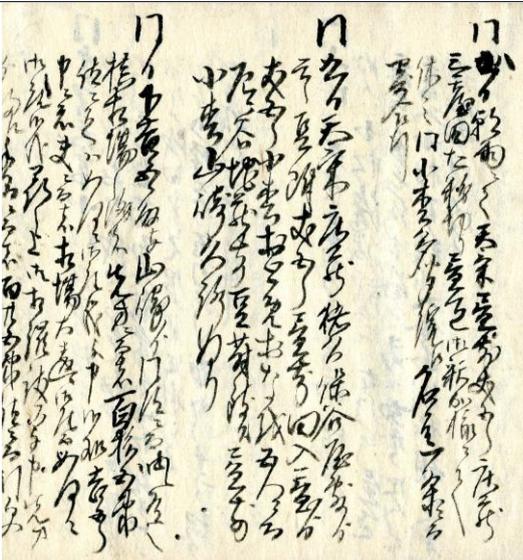
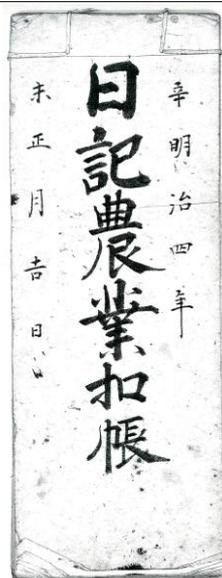
鎌倉電信中継所は、戦前は国際電報のやり取りに利用することが多かったのですが、海底通信は陸海軍とも密接な関係があつたため、戦中には軍用通信に利用されました。海底通信はその後、無線通信の急速な進歩により利用が減少し、一九五三年（昭和二八年）四月に鎌倉電信中継所が廃止、その後NTT社員の厚生施設「ゆかり荘」として再生しました。

明治・大正・昭和の時代を通じ五十余年間にわたり、日米の国交親善や日本の経済文化の発展上重要な役目を果たしたといわれる海底通信線の記念碑は、この地が国際的な中継所として活躍したことを後に伝えるものとして、ゆかり荘敷地内に建てられました。そのゆかり荘も二

〇〇七年（平成一九年）まで営業、二〇〇八年（平成二〇年）夏に取り壊されるとともに、その記念碑は若宮大路に面するNTT東日本鎌倉ビルに移されました。（参考『日米海底通信小史』 協力：東日本電信電話株式会社）

## 古文書

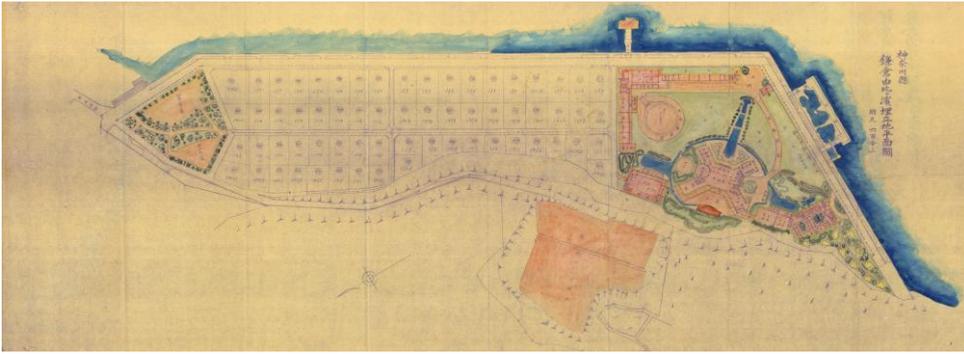
大船村「大津家 日記農業控帳」  
明治四年より三十二年まで農作業や村人の生活が当主権左衛門の筆で細かく記されている。（解説中）



寄贈資料紹介

埋立地図面

震災で崩落した霊仙崎下の海浜を埋立て分譲地にする計画が一九二八(昭和三年)から始まり、神奈川県や地元住民との折衝を重ね、埋め立てが進みましたが、初期の計画通りにはいきませんでした。中には最先端の造園家(ランドマ

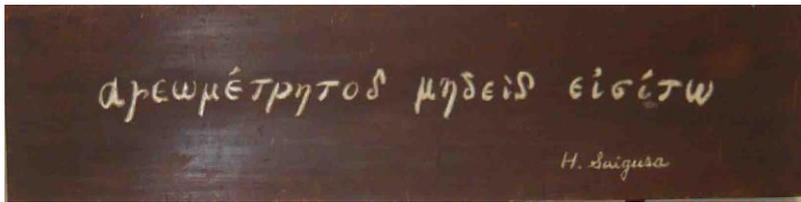


神奈川県鎌倉由比ヶ浜埋立地平画図(1/600) 戸野建築図事務所(昭和9年頃) 埋立地には、遊園地、一般住宅、公園、ホテルが建設される計画であった。遊園地には、メリーゴーランドや遊技場、ダンスホール、食堂、浴室、休憩室、海の家などが配置されている。

園家(ランドマーカーアーキテクト)戸野琢磨が提案したユニークな遊園地計画もありました。一連の資料が事業者の子孫武田光比古氏から寄贈されました。

鎌倉アカデミア扁額

鎌倉アカデミアは一九四六(昭和二十一年)年五月、材木座光明寺を仮校舎に開校された大学校でした。四年半の短い期間でしたが、学ぶ意欲に満ちたユニークな教育が行われ優秀な人材を輩出しました。この額は校長三枝博音が彫った扁額です。ギリシヤ語で「幾何学を学ばざる者、この門を入るべからず」という意味です。卒業生(廣澤榮氏)ご遺族から図書館へ寄贈されました。



哲学者三枝博音は「科学的に物を考えよ」という意味でこの言葉を彫りましたが、科学的に振舞うだけではないけない、人間の世界を力強く生き抜くものを鍛えとるようという箴言を並べたかったと述べています。(鎌倉大学廃校始末記)

※「鎌倉アカデミアを伝える会」は毎年五月に光明寺で開催されています。

古写真

大船駅

撮影 鈴木正一郎



大船駅西口 昭和42年12月3日 明治21年11月1日開業。駅の本屋は西口にあり、こちらが表口と呼ばれていた。

北鎌倉駅

北鎌倉駅 昭和44年5月18日 昭和5年より常設駅として開業 鎌倉の入口にふさわしいのどかな風景である。



※鈴木正一郎氏より寄贈の写真は現在整理中です。

## インタビュー（むかし語り）

滝川梅子さん（由比ガ浜）

### ―坂ノ下に生まれる

大正四年、坂ノ下一四番地の生まれで、現在九一才です。坂ノ下というところは漁師町なので家がびっしり建っていて、家の垣根が無く、海へ下がるのに、他人の家の軒先を通ってどんどん歩いて行くの。子どもの時は海が庭のようだったわね。国道が無いときは砂浜が広がった。そもそも、うちは十五代続くけど漁師ではなかったの。紀伊国屋文左衛門の話にあるような、蜜柑を舟で運んできて坂ノ下から遠くは群馬のあたりまで売りに行ったらしい。屋号は「善太郎さん」と言っておじいさんの代まではその仲買をしていたのね。沖に荷を載せた船を泊めて、みんなで蜜柑を陸に揚げて、うちの小屋には蜜柑を入れた石炭箱が山積みだったと母から聞いた。蜜柑を売り歩く人をボテイ（棒手振り）といって、おおかたみんなまじめなんだけど、中には途中で女遊びして、売上げを無くしてしまった人もいるとか。

父の代にはもうその商売をやっていないかったし、「漁師でもないのにこんな風の強いところに居てもしょうが無い」と、自分の土地のあった由比ガ浜へ引越したわけね。六地藏の近く

で「大町塔の辻一七八」だった。おかげで津波には遭わなかったけど。

### ―別荘・貸家

坂ノ下には別荘や貸家が多かった。児玉元帥の別荘もあったらしい。うちも二階家の大きな家だったので、王子製紙の金子佐市さんや神田須田町で銃砲店をやっていた人に冬場だけ避寒に貸していた。金子さんとはその後も母が長いことお付き合いをしていた。

「海月旅館」には寒い時期に東京からたくさんお客さんが来ていたわね。

### ―高浜虚子さんとお付き合い

祖父や父は由比ガ浜などあちこちに持っていた土地を人に貸していた。そのうち寸松堂さんから佐助の方に入ってすぐ、教会（セブンスデイ・アドベンティスト）の手前の奥に高浜虚子さんが能舞台をつくっていた。その土地を貸していたので、祖父は虚子さんと仲良くしていた。祖父は話が上手で、よく昔の話など虚子さんにしに行った。母も季節にはヨモギ団子や糸切り団子を作ったり、蕎麦を打ったりして持って行った。

虚子さんから頂いた「元朝の水捨てたりちやうずばち」という短冊を私が小さいとき祖父から読み方を聞いて大きな声でそらんじていたので、姉弟はびっくりしていたわ。他にも太い字で上手に書いた短冊があると思う。

私の「梅子」という名前も、祖父が虚子さんから「津田梅子」の話を聞いて、「偉い女の人」がいた。その人にあやかるう」と梅の咲く二月二十三日生まれの私に付けたのね。

その能舞台も関東大震災で潰れてしまったので、あとはうちで畑にして耕していた。すると素焼きの瓶がたくさん出てきた。舞台の共鳴を良くするために埋めておいたという話。

### ―建物強制疎開

戦時中六地藏から佐助に向かってカトリック教会側が強制疎開で壊された。昭和二十年の七月の暑い日で、今思えば壊さなくてもよかったのではとつくづく思われる。そのあたりは、六地藏から入った角に大きな古物商（村岡屋号）の彦地さん、今、藤沢ミシン屋があるところ。その隣がブリキ屋の飯窪さん、そしてお産婆の杉山さん。この方は針谷産婦人科病院で長いこと看護婦をしておられた。その隣に朝鮮総督をやった山梨半造さんの大きなお屋敷があった。隣組が一緒に塔の辻十三組と呼んでいた。結婚して住んでいた教会側の私たちの住まいも取り壊しになった。昭和二年頃、私がまだ子どものとき、よく隣の教会の庭で弟たちを遊ばせた。六地藏のところまで、めったに通らない自動車を見せに行つたのも今はうそのような話。あの教会にはりっぱな方々が集つていられたわ。住まいのあったところは教会に売った

ので今、教会の建物になっていて、そこでバザーをやったり、最近までバレーのお稽古もしていた。

### ――母から娘へ――

母は藤沢の宿場の旧家から嫁いできた。市民病院の近くの陣屋小路の「松田屋」（堀口）という殿様だけを泊める旅籠をやっていたと聞いている。蔵がいくつもあつたが震災で壊れたらしい。母の父は学があつて、鶴沼の別荘の方に「論語」などを講義に行つて、そのお手当てであちこちの土地を買つて増やしたという。

母は安斉へ嫁ぐまで横浜の大地主で多額納税者の牛山三郎さんの家へ行儀見習い奉公に出ていた。きちんとした言葉遣いで作法も心得た人だつた。母は義理堅く、奉公していた牛山さんのうちをよく訪ねた。五歳ぐらいの私の手を引いて弟をねんねこ半天でおんぶして出かけたことは母との思い出の一つ。

七月二十七日のお諏訪様のお祭りには母は日本髪に結つて人力を連ねて藤沢の実家へ行つた。横浜の方の姉妹も集るので総勢五〇人も集つてにぎやかなことと言つたら。

そんな母を手伝いながら料理などを覚えたので、あとで苦労はしなかつた。お正月の準備には樽にいっぱい漬けた数の子をすり鉢でゴリゴリと擦つて甘皮を取つた事など思い出す。娘時代はお花と和裁が得意だつたが、和裁は



昭和15年正月の家族写真

小町の二楽荘の近くにいた先生に習つた。前田里乃さんという方。そのころ小町には「待合い」があつて、先生が芸者さんの着物を縫うのを手伝つたことがある。また鎌倉には女中さんが多かったので五、六人に和裁を教えたこともある。結婚の時は巾の広い裁ち板を持つてきて一所懸命縫つた。急ぎの物は寝ずに縫つたわね。そして生活の糧にした。

### ――平和への思い――

戦争で、義兄（姉の夫）が海軍で戦死、滝川の兄も戦死し、私の弟たちも、長男が北支へ、次男、三男が軍隊へ行つたので、両親の子供を思う気持ちは本当に哀れだつた。武運長久を祈り、氏神様や大塔宮に参り、陰膳をすえて元気で奉公できることを祈っていた。

私は昭和一三年に結婚して昭和一三年、一六年、二〇年、二三年に子供が生れた。その頃は親の家作に住んで、母が子守も手伝つてくれた。のんきなものだつた。

ところが戦後昭和二五年に日立に勤めていた主人が労働組合の委員長をやつていたことで首切りのパージにあつた。裁判をして会社側から貰つた物をもとで仲間とダイカストの新しい仕事を始めた。その主人が亡くなつてもう一七年になる。私が「新日本婦人の会」の平和部会に入つて広島や焼津へ行つたのはだいぶ年を取つて、五〇才から六〇才頃のこと。まじめな真喜志（康守）先生と広島の水禁大会に行くとき昼も夜もスケジュールがびつしりだたいへんだつた。

鎌倉の古めかしい家に生れた私がこんな活動をやってるので不思議に思う人もいるわ。でもお友達もたくさんできて、この冊子『戦争を知らない子供たちに！』（健康で豊かな老後をつくる 鎌倉市民の会編）には懐かしい人が文章を書いている。小町の藤井静江さん、山崎の宇治産婦人科で働いていた渡辺さきさん、七里ガ浜の磯田鈴江さん、腰越の渡辺源三さん、山ノ内の高木慶子さん、宇都宮襄治さん、宮地元さんなど、しみじみ読み返したわ。

（2006年夏、滝川梅子さんのお話）

「近代史資料室だより」第2号  
発行 鎌倉市中央図書館近代史資料担当  
平成二十六年一月一日